

日本文法辞典

江湖山恒明編
松村 明

明治書院

江湖山恒明

お茶の水女子大教授

明治42年生。昭和10年東大卒。

松 村 明

東京大学助教授

大正5年生。昭和15年東大卒。

昭和37年5月15日発行

編著者 江湖山恒明
松村明

発行者 文入宗義

印刷者 横山豊

発行所 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

電話東京(291)0354・0355・3680・3927

振替口座東京 4991番

日
本
文
法
辞
典

は し が き

日本文法辞典という場合に、大きく分けて、二つの内容のものが考えられる。一つは日本語に関する文法論上の各種の術語などについて解説したものである。もう一つは、文法的に必要なものはたつきを示すことばの性質や意味・用法などを説明したものである。この二つのものは、どちらも十分な必要性が考えられる。前者は、いわば、文法のことさらに関する辞典である。日本語の文法論は、今日でも、いろいろの学説の対立があり、どれが定説かということはなかなかきめられない。学説がちがえば、それぞれに別々の術語が用いられ、また、同じ術語でも、別々の概念規定がなされる。日本語の文法を考えると、そこに用いられる術語をまず正確に理解するということはだいじなことである。したがって、おもな文法学説をふまえて、文法上の術語の解説をした辞典は、大いに必要であろう。ところで、後者は、文法的に説明したことばの辞典である。一般の辞典でも、たいていは、文法的な性質の説明をしているのであるが、なんといっても、かんたんなことが多い。文法的に必要なものはたつきをもつことばについては、やはり、もっと細かに説明した文法辞典というようなものが必要とされる。もちろん、一般の文法書には説明があるわけであるが、文法書では、一般的なこととして書かれていることが多い。特に、学説のちがいなどのあるものについては、やはり、一つ一つの語について、おもな学説をふまえた、文法的性質や意味・用法の説明をしたものが必要であろう。

このように、文法辞典には、二つの面からのものが考えられる。そこで、本書の編集に当たっても、文法上の術語の解説を中心とした術語編と、文法的に必要なものはたつきをもつことばの文法的性質や

意味・用法の説明を中心とした語彙編と、この二つのものを含めて文法辞典を考えていくことにした。ただ、実用上の便利さを考慮して、この二つのものを区分せず、術語も語彙も、すべて五十音順に配列する形式をとることにしたのである。本書の場合、術語編の項目は、かなり広い範囲のものを取り上げたが、語彙編の項目は、重点的に取り上げることにした。これは主として紙数の制限のためである。したがって、語彙編は、かなり狭い範囲のものになったが、取り上げた項目については、説明もくわしく、用例なども豊富に挙げたつもりである。術語編でも語彙編でもおんな学説上の差異などは、できるだけ挙げるようにし、なるべく現在までの学説の成果を取り入れるようにつとめたことは申すまでもない。

本書は、次にしるすような多くの方々の協力によるものである。原稿の執筆については、語彙編の敬語動詞・文語助動詞関係の項目は石井文夫氏、文語助動詞関係の項目は青木伶子氏、口語助動詞・口語助動詞関係の項目は田中章夫・外山映次両氏が主として当られ、術語編の諸項目は、青木・田中両氏のほか粕谷玲子・小林敏子・小津敏子・剣持瑛子の諸氏の協力を得た。また、小見智江氏には原稿の整理に助力を得、明治書院編集部の内河タケ子・只腰宏子の両氏には、原稿の整理・校正などに助力を得た。編者自身も、すべての原稿に目を通し、記述の統一をはかるとともに、かなりの項目を書き加えた。本書の責任はすべて編者が負うべきものであるが、本書が少しでも読者諸賢に喜ばれるものであったならば、それは、すべて上記の諸氏の協力のたまものである。

昭和三十三年五月

追記 本書は日本文法講座の一冊として刊行されたものであるが、多くの人々からの要望もあって今回単行本として出すことにした。

昭和三十七年四月

例 言

一、この辞典は、日本文法に関するおもな術語・事項についての解説や、日本語として文法上特に重要なはたらきをもつ語彙についての用法・意味の説明などを簡明に叙述したものである。語彙で採録したものは、動詞（文語だけ。同一語形で自動詞・他動詞の区別のあるものと、敬語関係のもの）・補助動詞（文語だけ。敬語関係のもの）・助動詞（文語・口語とも）・助詞（文語・口語とも）などである。

一、項目の配列は、術語・事項と語彙とを区別せず、すべて五十音順とした。その場合、術語・事項および口語の語彙については現代かなづかい、文語の語彙については歴史的かなづかいによった。なお、各項目の体系的な関連を示すために、巻頭に分類項目表を掲げた。

一、見出し語の出しかたは次のとおりである。

1、術語や事項については、漢字書き、漢字かなまじり、かな書き（かたかな・ひらがな）など、それぞれの語の慣例の表記で示した。漢字書き、漢字かなまじりの場合には、その下になで読みかたを示した（現代かなづかいによる）。

2、語彙についてはかな書きとし、漢字のあてられるものには、かっこ内に漢字かなまじりの書きかたを示した。かなづかいは、口語のものは現代かなづかい、文語のものは歴史的かなづかいによる。

一、各項目の解説は、だいたいにおいて、次のような順によっておこなった。

1、術語や事項については、(1)定義ないし語義、(2)異説・異称など、(3)おもな学説上の差異、(4)口語または文語における事実、(5)起源および変遷、(6)その他の問題となる点、などを項目の性質に応じて適宜取捨して記述した。

2、語彙については、(1)口語・文語の別、(2)所属する品詞の別、(3)活用の有無、および活用の別(助動詞では、活用のしかたそのものも)、(4)おもな意味・用法とその用例(文語の場合には、用例の口訳をつける)、(5)その他の問題となる点、などを語彙の種類に応じて適宜取捨して記述した。

一、解説の用語はつとめて通用のものに従った。解説に用いる術語については、文部省『中等文法』のものを基準とし、必要に応じて他のものを用いたが、それもあるべく一般的なものに限った。

一、本文の表記は、現代かなづかいにより、術語・固有名詞などのほか、漢字もできるだけ当用漢字の範囲内のものに限るよう心がけた。もっとも、用例の文(特に文語のもの)はこの限りではない。

一、関連のある項目は、解説の終りに↓印を用いて示した。

一、解説に用いた略語のうち、おもなものは次のとおりである。

①……………口語

自・他動…自動詞・他動詞

下二……………下二段活用

⊗……………文語

補助……………補助動詞

サ変……………サ行変格活用

自動……………自動詞

四……………四段活用

助動……………助動詞

他動……………他動詞

上二……………上二段活用

助……………助詞

一、用例の出典にも略称を用いたものがある。おもな例は次のとおりである。

万葉(集)

竹取(物語)

伊勢(物語)

源氏(物語)

宇津保(物語)

落窪(物語)

蜻蛉(日記)

土佐(日記)

更級(日記)

古今(集)

拾遺(集)

新古今(集)

今昔(物語集)

宇治拾遺(物語)

(古今)著聞集

平家(物語)

項目一覽表

第一部 術語編

1、言語一般

話しことば	二八三
口ことば	八八
口語	二〇七
文字言語	三三三
書きことば	三三三
文語	三三〇
標準語	二九六
共通語	三八三
方言	三三三
屈折語	八八
膠着語	二〇九
孤立語	二二三
抱合語	三三四

言語	二〇三
言語	二〇三
成立条件(言語の)	一七四
外形	四三
形式	三三
言語形式	二〇四
内部言語形式	二五〇
外部言語形式	四三
自由形式	一四七
音声形式	三三
付属形式	三〇五
言語意識	一〇三
言語行動	一〇五
言語活動	一〇四
ランガーージュ	三六三
ラング	三六三
パロール	二八八
発話	二八三
発話行動	二八三

発話段落……………二八三

*

構成的言語観……………二〇八

言語過程説……………二〇四

主体……………一五〇

素材……………二八六

場面……………二八六

入子型構造……………一八六

風呂敷型統一形式……………三〇九

天秤型統一形式……………三三三

零記号(ゼロ記号)……………三六六

語形論……………二二一

形態論……………二六六

2、文法総記

文法……………三三三

語法……………二〇〇

文典……………三三三

文法論……………三三七

説明文法……………一八〇

項目一覽表

記述文法	七
規範文法	七
解釈文法	四三
読解文法	四三
表現文法	三六
学校文法	六
教科文法	八
実用文法	一四〇
機能文法	七
文語文法	三一
口語文法	一〇八
一般文法	一三
歴史文法	三六七
比較文法	二九〇
文法範疇	三六
文法的事実	三六
文法上許容すべき事項	三六
文法学	三六
文法史	三六

*

3、言語単位

形態	九
文法形態	三六
形態論	九
形態素	九
意味	六
機能	一五
機能	七
言語単位	一五
文章	三三
文	三〇九
文節	三三
文素	三三
語節	二四
連文節	三〇
単語	二五
語	一〇七
連語	三八
語構成	二一

4、品詞分類

單純語	二六
派生語	二八
複合語	三〇
合成語	一〇八
疊語	一五
接辞	一六
接頭語	一六
接尾語	一七
語基	二〇
語根	二二
語幹	二〇
品詞分類	二七
品詞	二九
品詞の転成	二九
品詞論	二九
自立語	一〇
付属語	一〇
自用語	一〇

副用語	三〇五
陳述語	二八
關係語	三〇
觀念語	六
概念語	三〇
実詞	一五
実體詞	一五
詞	一三
小詞	一四
辭	一四
不變化詞	三〇七
變化詞	三三

5、体言

体言	一九三
形式体言	三
準体言	一五二
名詞	三〇九
準名詞	一五三
実名詞	一五

固有名詞	三三
普通名詞	三〇六
形式名詞	三
時の名詞	二四三
吸着語	三
不完全名詞	三〇〇
代名詞	一九五
人称代名詞	二六六
指示代名詞	一七〇
事物代名詞	二四三
物主代名詞	三〇六
疑問代名詞	八
反射代名詞	二六九
反照代名詞	二六九
反射指示代名詞	二六九
不定代名詞	三〇七
再帰代名詞	二四
關係代名詞	三
コソアド	二六
數詞	一七一

6、用言

助數詞	一五
用言	三〇一
形式用言	九
補助用言	三六
活用語	三〇
活用連語	三
動詞	二四〇
自動詞	二四二
他動	二四二
他動詞	二四二
可能動詞	二四
再帰動詞	二四
補助動詞	三三
存在詞	一六〇
形容詞	六
補助活用(形容詞の)	三三
補助形容詞	三三
形式形容詞	三

形容動詞活用……………	七	ク活用……………	六	副詞形……………	三〇
7、活用……………		シク活用……………	一七	終止形……………	一七
活用……………	六	形容動詞式活用……………	九	連体形……………	三八
動詞式活用……………	二一	形容動詞型活用……………	九	已然形……………	九
上一段活用……………	五	カリ活用……………	三	仮定形……………	三
一段活用……………	三	ナリ活用……………	二六〇	命令形……………	三九
下一段活用……………	一四	ダナ活用……………	二〇四	連用法……………	三九
上二段活用……………	七	タリ活用……………	二四	中止法……………	二七
二段活用……………	二五	強変化……………	一四	副詞法……………	三〇
下二段活用……………	一	弱変化……………	一七	接続法……………	一六
四段活用……………	三	混合変化……………	二三	終止法……………	一七
五段活用……………	一六	活用語尾……………	六	連体法……………	三九
変格活用……………	三三	語幹……………	一〇	命令法……………	三五一
カ行変格活用……………	四	形容詞型活用……………	七	仮定法……………	三二
サ行変格活用……………	一六	活用形……………	九	音便……………	三五
三段活用……………	二三	基本形……………	八〇	音便形……………	三六
ナ行変格活用……………	二五	未然形……………	三三	イ音便……………	七
ラ行変格活用……………	三七	否定形……………	二四	ウ音便……………	一八
形容詞式活用……………	七	連用形……………	三〇	促音便……………	一五
		中止形……………	二七	撥音便……………	二八

8、副用言

副用言	三〇五
副詞	三〇三
接続副詞	一七八
感動副詞	六
情態副詞	一五五
程度副詞	三三二
陳述副詞	三九
指示副詞	一三八
連体詞	三六八
副体詞	三〇四
疑問詞	八
接続詞	一七六
感動詞	三三
感嘆詞	三三
感動副詞	六
間投詞	三三
冠詞	三

9、付属語

付属語	三〇五
助動詞	一五
動辭	二四二
複語尾	三〇二
受身の助動詞	三〇
自発の助動詞	一四三
使役の助動詞	三五五
可能の助動詞	三
尊敬の助動詞	一九〇
敬讓の助動詞	三
丁寧の助動詞	三三
推量の助動詞	一九
意志の助動詞	九
打消の助動詞	二
希望の助動詞	七
伝聞の助動詞	三三
推定の助動詞	一九
詠嘆の助動詞	三

感動の助動詞	七
様態の助動詞	三三
指定の助動詞	二四
比況の助動詞	二九
時の助動詞	二四三
過去の助動詞	四七
完了の助動詞	七〇
回想の助動詞	四三
不変化助動詞	三七
助詞	一五
静辭	一七四
てにをは	三三
助詞相当連語	一五
後置詞	一九
前置詞	一八
格助詞	四六
接続助詞	一七
副助詞	三〇三
係助詞	四

終助詞	一四	合文	一〇九	主語	一四九
間投助詞	一六七	有屬文	三六八	總主語	一八三
準体助詞	一五一	有節文	三六九	題目語	一九五
並立助詞	三九	平叙文	三九	主題	一五〇
連体助詞	三九〇	疑問文	三八	述語	一五〇
準副助詞	一五三	感嘆文	一五	修飾語	一四八
準副体助詞	一五三	命令文	三五	被修飾語	二九三
10、文		一語文	三	連体修飾語	三六九
文論	三七	喚体	一五	形容詞的修飾語	九七
構文論	一〇九	述体	一五二	連用修飾語	三九一
文章論	三三	文の構造	三四	副詞的修飾語	三〇三
シンタックス	一六三	文型	三〇	連用語	三九一
コンポジション	二二三	基本文型	八〇	補語	三四
段落	二二六	基礎文型	六	客語	八三
文脈	三七	断句	二五	目的語	三五五
文の種類	三四	句	六六	対象語	一九四
単文	二四	節	一七	並立語	三九
複文	三〇四	音單語	三	接統語	二七
重文	一四九	文の成分	三五	獨立語	二四三
				提示語	三三

提示部	三三	所有格	一〇	法	三三
切れ続き	八五	目的格	三六	ムード	三〇七
言い切り	七	述格	一五	叙法	一六〇
係結び	五	修飾格	一四	叙述法	一六
呼応	一〇九	属格	一八	叙想法	一六
叙述	一五	对格	一九	条件法	一五
陳述	三八	与格	三七	仮定法	五
		呼格	二〇	直接法	三八
11、文法範疇		人称	二六	平叙表現	三八
意義範疇	七	自称	二六	詠嘆表現	三
機能範疇	七	对称	一九	感動表現	六
形態範疇	六	他称	一九	情意表現	一五
語形変化	二二	不定称	三〇	命令表現	三〇
屈折	八	一人称	二	禁止表現	五
曲用	八	二人称	二六	疑問表現	八
性	一三	三人称	二三	希望表現	九
数	一〇	近称	六	推量表現	一〇
格	四	中称	三七	伝聞表現	三
主格	四	速称	三	勧誘表現	九
				指定表現	一

否定表現	二九四
二重否定	二六四
反語表現	二六八
比況表現	二九一
婉曲表現	三三
比較變化	二九〇
原級	一〇三
比較級	二八九
最上級	二四
話法	二九七
直接話法	二三八
間接話法	二五
*	
時	二四一
テンス	三三
時制	二六
歴史的現在	三六七
アスペクト	一
進行形	一三
アオリスト	一

態	一九三
ヴォイス	一八
進行態	一六三
動作態	二四〇
静止性動作態	一七四
継続態	二五
反復態	二八九
様態	三三
將然態	一五
將現態	一五
已然態	一六
既現態	一七
始動態	一四
終結態	一七
相	一八三
中相	二三八
能相	二五
敬相	九
所相	一六
勢相	一七

能動	二七三
受動	二五二
受身	二〇
可能	三
使役	一五
自発	一四三
自然可能	一八
12、敬語	
敬讓	九四
敬語	九二
敬語法	九
待遇表現	一九三
絶対敬語	一六八
關係敬語	六三
尊敬語	一八九
謙讓語	一〇五
尊大語	一九
丁寧語	二三
敬体	九五

敬称……………	六四
13、文章様式	
文章様式……………	三三
文体……………	三三
文体論……………	三三
言文一致……………	一〇七
説明文……………	一八〇
論説文……………	三三二
記事文……………	七
実用文……………	一四〇
報告文……………	三四
公用文……………	一〇九
法令文……………	三四
判決文……………	二八八
詔勅……………	一五
上表文……………	一五
祝詞……………	二七
宣命……………	一八一
諷語文……………	三〇五
願文……………	六
祝願文……………	一〇
会話文……………	三
手紙文……………	三三
書簡文……………	一五
候文体……………	一八五
かな文……………	三
雅文……………	五
和文……………	三九七
擬古文……………	七
漢文……………	六
東鑑体……………	二
変体漢文……………	三三
和漢混淆文……………	三九四
普通文……………	三〇六
俳文……………	二六
写生文……………	一〇
散文……………	一三
韻文……………	七
口語文……………	一八
文語文……………	三二
口語体……………	二〇
文語体……………	三二
14、修辭	
修辭法……………	一八
強調……………	八
対句……………	三三
枕詞……………	三三
懸詞……………	二七
序詞……………	一七
擬人法……………	六
縁語……………	三
15、表記	
五十音圖……………	二二
表記法……………	二五
正書法……………	一七
わかち書き……………	三九
送りがな……………	三